「研究手法の開発・検証」の審査基準

お茶の水女子大学　伊藤大幸

「研究手法の開発・検証」とは

- 研究手法の開発・検証には、**質問紙尺度**、**検査**、**実験課題**、**観察技法**、**研究デザイン**、定量的または定性的な**分析手法**など、発達心理学研究の遂行に資する新たな研究手法の開発もしくは既存の研究手法の検証に関する報告が含まれる
  - 定型的な尺度開発に限らず、既存の発想にとらわれない実験課題の構築、心理学以外の領域との学際的な連携に基づく測定手法の検証、質的データの新たな記述・分類の試みなど、多様な内容の投稿を歓迎する

「報告論文」審査基準の手引きより

審査基準

	原著論文	報告論文
萌芽的研究	・先行研究の網羅的レビューに基づいた社会的現象や学術的概念の提案 ・十分サンプリングデータと適切な解析による新規の報告	・先行知見の限られる社会的現象や理論的裏付けが限定的な学術的概念の新規な報告 ・サンプリングの少なさ・偏りのある希少的・速報的な発見や事実の報告
追証的研究	・事前登録および検出力検定を行っている直接的追試 ・直接的追試に別の研究を加えた研究 ・特に異なる発達段階における知見の再現性の検証を目的として、先行研究の手続きを変更した概念的追試	・事前登録や検出力検定を行っていない直接的追試 ・先行研究の手続きを変更した概念的追試
研究手法の開発・検証	・先行研究や理論的背景に基づく研究手法の独自性・有用性の提示 ・研究手法の妥当性に関する多面的・包括的な検証	・研究手法の妥当性に関する部分的・萌芽的な検証

「報告論文」審査基準の手引きより

審査基準：研究手法の独自性・有用性

◆ 研究手法の**独自性・有用性**

- 原著論文と報告論文のいずれにも共通
- 開発・検証された研究手法が、**既存の方法と比較**して、**学術研究や実践への応用に資する新たな視点や機能**を提供していることが求められる
- 関連する**先行研究や理論的背景**を踏まえ、手法の独自性と有用性が説得的に論じられている必要がある
- 独自性・有用性の評価は、表面的な新規性の有無ではなく、**実質的・内容的**な観点に基づいて行われる

「報告論文」審査基準の手引きより

審査基準：研究手法の独自性・有用性

◆ 掲載が認められる例

- 既存の手法との特徴の違いや利点が明確
- 今後の研究・実践への貢献が具体的・説得的に明示されている（国際比較、オンライン実験、スクリーニングなど）

◆ 掲載が認められない例

- すでに類似する手法が存在し、独自性が不明確
- 今後の研究・実践への貢献の可能性が限定的（概念の理論的裏づけが不十分、適用場面が著しく限定されるなど）

審査基準：研究手法の妥当性

◆ 研究手法の**妥当性**

- 研究手法の妥当性について、その利用目的に照らして十分な性能を備えていることが、**実証的に示されている**必要がある
- 原著論文とは異なり、**必ずしも多面的・包括的な検証が求められるわけではない**
- つまり、手法の独自性・有用性が明確であり、その妥当性が初期段階であっても一定の科学的根拠に基づいて示されている場合には、報告論文として掲載可能である
- ただし、サラミ化はNG

「報告論文」審査基準の手引きより

尺度開発論文における原著論文と報告論文の比較

※大まかな目安です

		原著	報告
信頼性			
内的整合性	項目同士の一貫性の程度	○	△
再検査信頼性	時間を隔てた得点の安定性	○	△
評価者間信頼性	評定者間の得点の一致度	△	△
項目反応理論	項目特性に基づく測定精度	△	△
妥当性			
内容的妥当性（内容に基づく証拠）			
定性的検証	理論的観点に基づく評価	○	△
定量的検証	複数の専門家の合意に基づく評価	△	△
因子的妥当性（内部構造に基づく証拠）			
探索的因子分析	因子構造の探索的な抽出	○	△
確認的因子分析	仮定された因子構造の検証		△
測定不変性	群間での構造や項目機能の不変性	△	△
外部変数との関連に基づく証拠			
収束的妥当性	同一または類似概念との強い関連の確認	○	△
弁別的妥当性	異なる概念との弱い関連の確認	○	△
多方法検証	異なる情報源・測定法間の関連の検証	△	△
既知群の比較・識別	既知の群（一般群／臨床群など）の識別	△	△
反応過程に基づく証拠	回答時の認知過程の妥当性	△	△
結果に関する証拠	使用による結果の適切性	△	△

○：必須とされることが多い要素、△：必須ではない要素

研究例１：Choueiri et al. (2023)

◆ 概要

- 18-36ヵ月児に特化した自閉症スクリーニング手法の検証

◆ 研究手法の独自性・有用性

- レベル２の「対話型」スクリーニング
- 短時間・簡便なトレーニングで実施可能
- 単なる尺度検証ではなく、プライマリケア・早期介入・診断医を結ぶコミュニティモデルを構築

Choueiri et al. (2023). The RITA-T (rapid interactive screening test for autism in toddlers) community model to improve access and early identification of autism in young children. Child Neurology Open, 10, 2329048X231203817.

研究例１：Choueiri et al. (2023)

◆ 研究手法の妥当性

- ASDの識別精度（n=244）
  - ✓ AUC＝.88、感度＝.77、特異度＝.95
- 診断待機期間の短縮：113日→86日
- 実施者への調査
  - ✓ ほぼ全員が「容易に導入可能」と回答
- 家族への調査
  - ✓ 支援されていることを実感

研究例２：Zhou et al. (2025)

◆ 概要

- スマホ上で動作する認知・感覚課題アプリの基準関連妥当性

◆ 研究手法の独自性・有用性

- オープンソースで自由に利用・拡張可能
- スマホ上で自己実施可能→遠隔実験も可能
- ５種の認知課題・感覚課題を統合

Zhou, S., Brady, B., & Anstey, K. J. (2025). Criterion validity of five open-source app-based cognitive and sensory tasks in an Australian adult life course sample aged 18 to 82: Labs without walls. Behavior Research Methods, 57(2), 69.

a) Spatial Memory Task

b) Trail Making Test Part A and B

c) Stroop Test

d) Ishihara Test

e) dBHL Tone Audiometry

研究例２：Zhou et al. (2025)

◆ 研究手法の妥当性（n=43）

- 研究者実施版との相関
  - ✓ r=.69～.89（空間記憶課題除く）
- 聴力検査による軽度難聴の識別精度
  - ✓ 感度＝.83、特異度＝1.00
- 年齢との関連
  - ✓ 大部分の課題で理論通りの加齢効果を確認

まとめ

- ◆ 独自性・有用性は明確に示されているか
  - 既存手法に対してどのような利点があるのか
  - 今後の研究・実践にどのような波及効果をもたらすのか
- ◆ 妥当性は目的に照らして十分か
  - 多面的・包括的検証は必須でない
  - 利用目的に応じた科学的に妥当なエビデンスがあればOK

部分的・予備的な検証であっても
「意味がある」「使えそう」を説得的に示すことが重要